

内モンゴル・エレンホト市における辺境貿易

服部健治

はじめに

本報告は愛知大学学術研究の一環である「内モンゴル経済における辺境貿易の役割」を考察するために、初歩的に行われた現地調査のレポートである。内モンゴル経済の動向と特色を解明するうえで辺境貿易がどのような役割を担っているのか、まず実態的に把握するのが本現地調査の主たる目的である。

内モンゴル自治区には二つの大きな国家級の辺境貿易都市（中国語で口岸城市という）がある。二連浩特市（以下エレンホトと称す）と満州里市である。内モンゴル経済の発展を支える内在的要因と外在的要因があると仮定するなら、エレンホトと満州里の両市は外在的要因を担う重要な経済地点であることは言うまでもない。

とりわけ内モンゴル自治区のもつ地理的条件、つまり内陸地区という制約を考慮すると、外国と直接接しているという環境は、制約を有利な方向に転換させる経済的ファクターであることが了解できる。

改革・開放政策が本格的に実施されるにつれて、内モンゴル自治区を含めて内陸地区と沿海地区との格差が大きな政治的、経済的、社会的な問題として惹き起されてきた。そのため二〇〇〇年から西部大開発が真剣に提議された。内陸に位置する内モンゴルの経済を考察する場合、やはり中国政府が重視する西部開発政策のインパクトも無視することはできない。さらに国内の制限緩和を目指すWTO（世界貿易機構）加盟後の動向も考慮しなければならぬ。また、海外との接点にある辺境貿易を考察するときに、中国の新しい動きである「走出去」（海外進出）の方針もどのような影響があるのか考えざるをえない。

こうした問題意識をもちながら、まず実態面の調査を進めるために、二〇〇三年三月末に内モンゴル自治区の省都であるフフホトを訪問した。ここでは一般的な経済的考察を行った。第二段階として辺境貿易の重要な地点であるエレンホトを二〇〇三年八月に訪問し、実地の調査を行った。

本調査はエレンホトの現地調査報告であり、最終論文作成の前段階と考えてもらいたい。あくまで事実関係の把握と実態の

考察にとどめた。

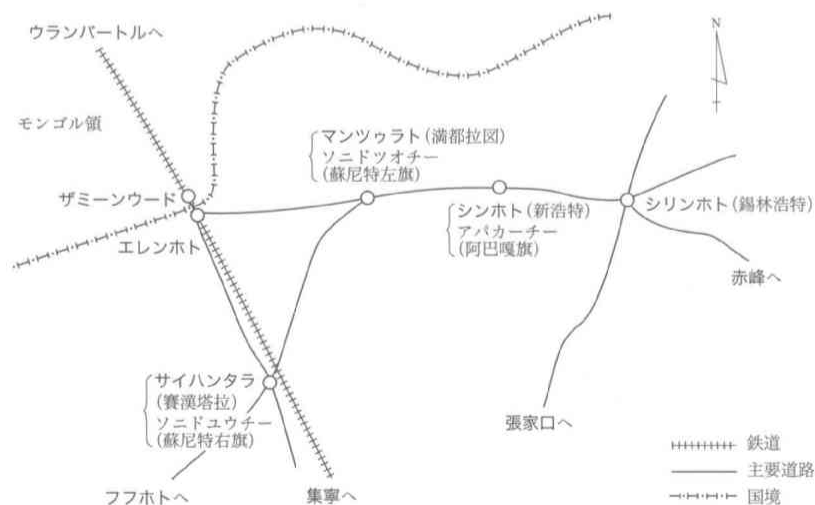
一 エレンホトの概況

エレンホト市は内モンゴル自治区の北部に位置し、中国のなかでもモンゴル国と鉄道で接する唯一の開放都市である（本書二頁「内モンゴル自治区行政区分図」参照）。エレンホトに行くには二つの手段がある。ひとつは鉄道である。鉄道は国内鉄道と国際鉄道の二つの路線がある。内モンゴルの集寧とエレンホトを結ぶ国内路線と北京からエレンホトを通って、モンゴルの首都であるウランバートル、さらにモスクワに続く国際列車である。国際列車の開通は早く、一九五六年一月である。

あとひとつの交通手段は幹線道路である。三方からエレンホトに行くことができる。フフホト、集寧、そしてエレンホトも属しているシリント（錫林郭勒）盟の行政の中心都市であるシリント（錫林浩特）の三つの都市からである。いずれの場合もエレンホト手前のサイハンタラ（賽漢塔拉）蘇尼特右旗）を通過しなければならない。

今回の現地調査では、私はまず北京からシリントへ飛行機で飛んだ。一時間である。一泊したあと、翌日朝早くシリントを乗用車で出発した。シリント→シンホト（新浩特）阿巴嘎旗）→マンツウラト（滿都拉圖）蘇尼特左旗）→サイハンタラ（賽漢塔拉）蘇尼特右旗）→エレンホトのルートである。

見渡すかぎりの草原を走行した。何よりも紺碧に浮かぶ雲の形状が印象的である。地平線の端まで続く大空に白いペンキを



エレンホト近辺の交通図

注：「旗」は内モンゴル自治区内の行政単位を示す。



内モンゴルの草原

地平線につながる国道の空の青と草原の緑のコントラスト



エレンホト市内の風景 道は広いが車は少ない

大胆に書きなぶるかのごとく、さまざまの形を変えて雲が通り過ぎていく。「雲は天才である」という言葉があるが、いつまでも連なる草原を下に、流れ行く雲の上に描いたカンバスを車窓の前面に見ながら、六時間強の車の旅が続く。道路は省級一級の幹線路であるが、まだまだ舗装が整備されていない。

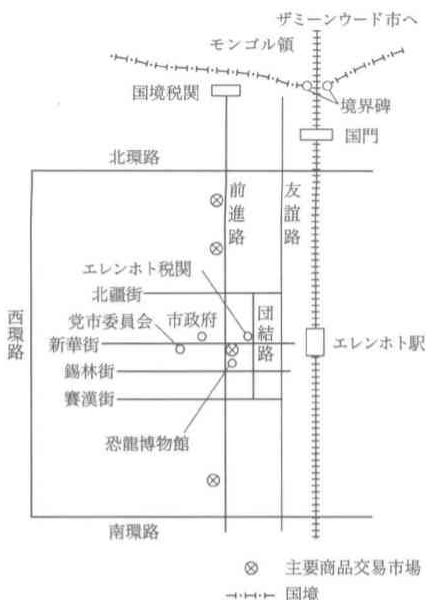
エレンホト市を訪問したときは夏であるが、気候はさわやかである。ただ、日中の温度差は大きく、夜ではやや寒いくらいである。町並みは、アメリカ西部にできた町のような感じ、市内の道幅は広く、車の数も多くない。高層ビルはほとんどな

く、のどかな草原の町といった風情がある。

市区の人口は約一〇万人で、内訳は市の戸籍を持っている人は二万人、常駐者は五万人、季節的な流動人口は三万人といわれている。民族は漢民族のほか、モンゴル族、満州族、朝鮮族、回族、ダフル、オロンチョン、エヴェンキ、羌族などが住んでいる。面積は一六平方キロメートルで、行政的にはシリントル（錫林郭勒）盟に属している。

そもそもエレンホトとはどんな意味なのか。「二連浩特」とはモンゴル語の漢字読みであり、「二連」のモンゴル語発音が「エレン」である。市の郊外にあるエレンタブスノールといわれる塩湖（中国語で二連塩池と称している。タブスとは塩、ノールとは湖とのこと）のモンゴル語から来ている。エレンとは戈壁砂漠が織り成すさまざまな幻影的な景色を描写した表現で、蜃気楼のようなといった感じである。「浩特」（モンゴル語でホト）とは町という意味である。

一九八五年一月にエレンホトは内モンゴル政府により批准され準都市となり、その年の六月に國務院は一級開放都市として承認した。さらに八六年三月に内モンゴル自治区内の計画単列都市、省都フフホトといった都市と同等の権限を付与に指定され、九二年七月には國務院が承認した全国で一三の辺境開放都市のひとつに指名された。内モンゴル自治区では満州里も指定された。



エレンホト市中心部の概略図

二 エレンホトの交通網

エレンホト市が辺境開放都市に指定された有利な条件は、言うまでもなくモンゴル国と接し、交易の基点だからである。それを保証しているのは交通機関の発展である。前述したとおり、エレンホトは国際列車の乗り継ぎの窓口となつてゐる。北京からモスクワ行きの国際鉄道は二ルートあり、ひとつはエレンホト経由、あとひとつは満州里経由である。エレンホト周りのほうが一四〇キロメートルも短縮される。

エレンホトを経由する北京発の国際列車は、モスクワ行きが毎週水曜日に、ウランバートル行きが毎週土曜日に発車する。

エレンホト経由の重要性は、エレンホトから伸びる鉄道（京包線）は、天津港に連結しており、日本、韓国、東南アジア諸国がモンゴル、ロシアと通商する場合の基本的な物流のルートとなつてゐることである。また、海と接していないモンゴルにとつても中国、ロシア以外の諸外国と交易を行う際の機軸ルートとなつてゐる。

特に近年、日本はモンゴル、ロシアとの貿易を強めており、天津港に陸揚げし、エレンホト経由での交易量は増加している。他方、中国国内の企業の対モンゴル、ロシアの交易も拡大しており、国際鉄道とは別に集寧を基点とする中国国内の鉄道路線の拡充が進んでゐる。エレンホトから集寧へ、集寧から東の方向へは北京、天津と渤海湾地区につながり、西の方向はフフホト、包頭、南の方向には大同を経由して山西省の石炭地区と連結してゐる。

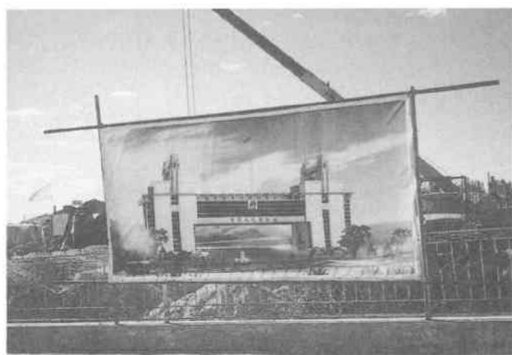
中蒙両国の国境をまたぐ鉄道線路の上に橙色の大きなレンガ作りの門があり、「国門」といわれてゐる。一九八四年九月三〇日に完成し、国境線から中国領内に一〇・六・五メートル離れたところに位置してゐる。真ん中が空洞で列車が通つていく。門の高さは一三・五メートル、線路をまたいだ長さは一五・五メートル、幅四・五メートルの凱旋門のような巨大な建物である。門の上にはモンゴル側に向かって、大きな赤い字で「中華人民共和国」と書かれた横長のプレートが張られてゐる。レンガの壁の傷みがひどくなつたので、新しい近代的な建物が近く建てられることになつてゐる。



モンゴル側から見た国门
「中華人民共和国」の7文字がはっきりと見える



中国側から見た国门
ゲートの向こう側がモンゴル領につながる



建設中の新しい国门の完成図
目下工事がおこなわれている

国门からモンゴル国境に向かって少し歩くと、国境を示す境界碑が立っている。漢字とモンゴル文字で書かれている。碑の向こうはモンゴルの町、ザミンウード (Zamenwood、扎門烏德) の建物が遠望できる。国门の周囲は見渡す限り緑の草原で、ところどころにモンゴル族の移動の家であるパオが見える。

国门、特に境界碑は観光の名所となっており、エレンホト市内一日遊覧のコースにも入っている。国境碑というものは、単純に勝手に建設できるものではなく、中央政府の批准と国境を接する相手側の国の同意も必要とのことである。エレンホトの

国境碑は以前は三五七号碑といわれ、中国では珍しく二つの碑が対になって建てられた。警備の兵士が二人立っており、碑の向こう側、つまりモンゴル側に歩いていこうとすると注意した。中国のエレンホトとモンゴルのザミンウード市の国境に立つ三五七号碑は、大きく立て替えられて八一五号碑と改名され生まれ替わった。

三 経済建設

エレンホトの経済発展は、一九九二年に辺境開放都市に指定



国境碑に挟まれた鉄路に立つ中国軍の兵士
奥がモンゴル領、遠くにモンゴル側の国門が見える



中国とモンゴルの領界に立つ国境碑
815号碑は2002年に新しく建てられた

エレンホトの経済規模

	2002年	2003年
貨物取扱い量	421万トン	500万トン
GDP	6億元	8億元
財政収入	1.1億元	1.3億元
関税収入	5億元	6億元
貿易総額	7.4億ドル	8億ドル以上
出入国人口	のべ76.5万人	のべ90万人

注：2003年は予想値である。

されてからといわれている。エレンホト市に見られるように、この一〇年間における内モンゴルの辺境貿易の伸張は、内モンゴル経済の進展と連動している。それは内モンゴルを含めた国内の市場経済が拡大するにつれて、辺境貿易に従事する商人、企業の数が増えたこと、貿易の形態が多様化したこと、中国国内の産品が数量、品数とも増加したことが指摘できる。ちなみにエレンホトの一人当たり年可処分収入は一万元を超えた。

エレンホトの経済発展は、モンゴルに接する「口岸都市」という特色を持っているがゆえに、辺境貿易、観光貿易、加工貿

易の三つが支柱産業として存在する。エレンホトの経済関係部門の人々は、自らを「国際口岸商貿旅遊城市」を称しているが、三つの支柱産業がそのなかに凝縮されている。

辺境貿易がエレンホトの経済発展の中核であるので、貿易、通商関連のインフラ建設が近年強化されている。二〇〇〇年から三年間の基本建設投資額は一〇億元に上る。関係経済部門の話では、二〇〇二年はじめに国家统计局が行った中国全土の百の県レベル経済総合指数によると、エレンホトは六四位、発展活力は二六位、発展の潜在力是一位と言われている。

主な経済数字は右表のとおりである。

今後のエレンホトの経済発展を考えると、発展に寄与するよい条件が整っていると思われる。政策的にはWTO加盟のインパクト、よりいっそうの国内市場の拡大と外国との交易が重要になってくる。西部大開発政策の進展、内モンゴル自治区の一層の対外開放政策の推進なども大きな影響を与えている。特に胡锦涛主席のモンゴル訪問は中蒙関係の発展に有益であるのみならず、辺境貿易の活性化にプラスであった。

二〇〇三年と〇四年の二年間に三〇億元を投資して、主に次のような工事を行うことになっている。鉄道の貨物駅の拡張、道路の整備建設では、二〇八国道（サイハンタラ（賽漢塔拉Ⅱ蘇尼特右旗）—エレンホトのルート）、エレンホト—ザミーンウード間の道路、都市環状道路、このような交通網の拡充以外に変電所、送電所、電線網、汚水処理場、鉄道沿線のグリーン道路、防風林、国門の新設、総合病院、高等学校、市の広場、新旧市街の連携工事などがある。また、二〇〇五年には貨物取り扱量を二二〇〇万トンにすることを目標にしている。

四 辺境貿易の概要

エレンホト市内から前進路（二〇八号路）にそって北に行く、国境の出入国検査の大きな建物が見えてくる。ちょうど鉄道をまたぐ国門の西側に位置する。総工費五六〇〇万元をかけて作られ、面積は三四・三平方メートルである。設計では荷物吞吐量は二四〇万トン、のべ三〇〇万人の出入国が可能である。

その建物の中は、中国各地の国際空港の機能と同じように、

旅客の出入国検査、税関検査、動植物検疫、貨物の通関検査場などの検査機関とレストラン、免税店、待合室などがある。出入国の検査窓口は、入国、出国それぞれ四つ、合計八つの窓口がある。また、旅客と貨物は別々に取り扱われる。

建物の北口はモンゴル国の辺境検査場に接しており、南口は二〇八号路に連なっている。モンゴルから来た商人は、エレンホトで買い付けた商品をここの検査場に運び、通関の手続きをしたあと、今度はモンゴル側の通関所に持っていくのである。辺境貿易に従事する中蒙両国の商人には、通関を簡便に出入りできる許可書が発給されている。

現在エレンホトでは辺境貿易は二つの方式で行われている。主にモンゴルへの輸出は「辺民互市方式」というもので、モンゴル人の国境貿易に従事する商人が、観光ビザでエレンホトに入り、中国の商品を購入していく方式である。購入する商品は



エレンホトで大量の物資を買い入れた
モンゴルのトラック
カープレートにモンゴルの国章が見える



エレンホトの国境税関ビル



国境税関ビル内の光景
多くのモンゴル人が出国手続をしている

食料油、野菜、果物などの農産物、衣料服装、靴、帽子、日用品などの紡織・軽工業品、建築材料、電気通信、パソコンなどである。

モンゴルからの輸出は「小額貿易方式」というやり方がとられ、辺境貿易に従事する許可証をもった企業が、中国国内の市場ニーズにあった商品を買付けける。これはパーター貿易の形態に近い。金属廃材、木材、化学品、肥料、鋼材などをモンゴル、ロシアから購入して、電気製品、建材、内装材料などを輸出する。

(1) 輸出

・ 輸出入総額…二・一八億ドル(前年同期比二四・八%増)
うち輸出…〇・四六二九億ドル(一四・〇%減)

輸入…一・六五五一億ドル(四二・八%増)

輸出が減少した原因は輸出企業の代理所得税の徴収を強化したからで、代理手続費で事業を立てている企業には打撃であるといわれている。

・ 輸出商品の八割近くを占めるのは、建材、農副産品、電機製品。

エレンホト市内には延べ面積四万平方メートルの中蒙商品交易市场が数か所あり、中国人とモンゴル人が入り交ぎって商売をしている。店舗は二六〇〇件あるといわれている。日用品、衣類、軽工業品を中心にほとんどあらゆる品物が売られている。

エレンホトと満州里を合わせた内モンゴルの辺境貿易の総額は、少し統計が古いが、二〇〇〇年一六・七二億ドルであり、内モンゴルの貿易全体の六三・七%を占めている。辺境貿易の金額では中国側の輸入が八三%を占めているのが特色である。モンゴル、ロシアからの品物は金額のような大きな素材、原材料が多いからである。

エレンホト市の二〇〇三年一月―七月の貿易は以下のとおりである。



中蒙商品交易市場の商店
看板には中国語とモンゴル語のキリル文字が併記されている



交易市場内部の光景



両替屋 モンゴル紙幣を数えている

建材の主な製品の内訳：セメント、床に敷く皮革、天井板、

床レンガ（この四品目で輸出の三三・六%を占める）

農副産品の内訳：野菜、食品、小麦粉、果物（この四品目で輸出の二一・八%を占める）

・最近の特色は電機製品の増加である。

二〇〇三年一月～七月：六八三四台、三八一萬ドル（前年

同期比二二・二%増）

主な製品の内訳：冷蔵庫、工作機械、クレーン、鉄道敷設

機器、羊毛分離機器、レンガ製造機、製麵機など。

・三〇〇萬ドルを超えた電機製品輸出企業：運通公司（辺境

貿易の輸出の二六・七%を占める）、万利公司（二二・〇%）、

宏利公司（二〇・一%）。

(2) 輸入

・輸入製品の九割を占めるのは、銅鋳粉、原木、畜産品、塩

化カリウムである。

・一〇〇〇萬ドルを超えた輸入企業：宏基公司（輸入の一・九

三%を占める）、北方公司（一四・一%）、合作公司（七・六

%）、福運公司（六・二%）、泰達公司（六・二%）。



中蒙商品交易市場のひとつ
「エレンホト義烏商貿城」の入口

辺境貿易では商品の売買のみならず、労働者の派遣も行っている。二〇〇三年一月―七月までにエレンホト市とモンゴル、ロシアとで労務派遣契約が九件行われた。主に土木建築工程三件、その他は住宅建設、ステンレス窓加工、モンゴルパオ組立、絨毯生産、レンガ製造、野菜の栽培、道路敷設工事などである。モンゴル、極東ロシアは人口が少ないので、中国人労働者の派遣が相当行われている。

ザミーンウードの概略

エレンホトに對峙するモンゴル側の辺境貿易都市、ザミーンウード市について簡単に紹介する。ザミーンウード市はモンゴルにおいて中国側と接する最大の対外都市で、エレンホトから四・五キロメートルの所に位置する。面積は四八平方キロメートルで人口は約八五〇〇人。

住民の多くはハルハ・モンゴル人 (Kruk Mongolia、喀拉喀蒙古族) である。その多くは、貿易と観光、サービス業に従事している。市内はロシア風の建物が数多くあり、郊外には観光用のモンゴルパオの休暇村もある。

モンゴルの国会にあたる大フラルは、二〇〇二年春に「モンゴル国自由貿易開発区」一案を討議することを採択した。同年六月にモンゴルとロシアの国境に位置するアルタンブラーグ市 (アラ坦布拉格) の「自由貿易区權益法」と中蒙辺境のザミーンウード市の「貿易・観光・サービス開発区權益法」の草案が上程され、審議のすえ二〇〇三年の春に採択された。

この法律によって、ザミーンウード市は「自由経済区」を建設することが認められ、中国の保税区と経済特区の二つの機能をもった自由区が誕生した。自由区に設立された企業の所得税の減免税、土地費用の削減、通関の簡略化、外為、金融の簡素化などがうたわれている。

以上をもって、二〇〇三年八月に実施したエレンホトの現地調査報告を終える。二〇〇四年夏に、内モンゴル自由区のもう一つの重要な辺境貿易都市、滿州里において現地調査を行う計画がある。実地調査のあと、最終的に内モンゴル経済の発展における辺境貿易の役割について小論を取りまとめる予定である。

なお、本報告書は現地でのヒヤリング、現地で購入した資料をもとに作成したものである。エレンホト市党委員会、旅遊局、税関 (二連海関) 等の関係者に心からお礼申し上げます。